すなっぷ

さりげないスナップ写真のすてきな笑顔のように
群馬の教育や文化の話題を、ふだん着のままで紹介するシリーズ

福祉の世界に一歩を踏み出す

高崎健康福祉大学健康福祉学部 社会福祉学科の実習報告会と座談会

高崎健康福祉大学

高崎市にある高崎健康福祉大学は人間発達、健康福祉、保健医療、薬学の４学部を持つ、県内有数の健康と福祉を学ぶ大学です。昨年末、１２月８日、健康福祉学部の社会福祉学科に学ぶ学生さんたちによる実習報告会が開かれました。日に日に老いつつある私たちにとって福祉は切実な問題です。そこで、若者たちがどんな体験をしたのか、福祉についてどんな考えを持っているのかを知るためにお邪魔しました。さらに大学にお願いして、翌日、４人の学生さんと座談会をもつことができました。高齢社会を迎えるにあたって、少しでも心構えをしっかりしたものにしたいと願って臨みました。

実習報告会から

報告は７つのグループによってなされました。そのうちの６グループが相談援助実習でゼミ毎の報告、もう１つが精神保健福祉援助実習です。

相談援助実習グループの実習先は①市町村社会福祉協議会、地域包括支援センター、病院などの機関、②児童養護施設、老人保健施設、特別養護老人ホーム、老人デイサービスセンター、肢体不自由児施設、障害福祉サービス事業所、などの施設です。老人向けの機関や施設に限らず、子どもや障害をもつ人たちとも関わっているところが多いことに驚きました。

精神保健福祉援助実習は県立精神医療センターをはじめとする県内の５つの精神疾患対象病院と障害福祉サービス事業所、就労支援施設で行われました。

この実習は、卒業時に社会福祉士や精神保健福祉士の国家試験を受けるために欠かせないものになります。教員になるための教育実習に似ています。あるグループはタイトルに「24 日間の戦い」と表現していましたが、自分との戦いでもあったことでしょう。学生のみなさんにとって、この報告会で、自分の体験をしっかりとした言葉で整理し、聴衆に伝えることも大切な学習なのです。

聴衆は2年生

この日、会場で学生の発表に耳を傾ける聴衆は同じ学科の２年生のみなさんが中心。この大学では資格取得が学習のベースになっており、学生は２年生の後期からゼミに所属して本格的な実習への準備を始めます。そしてさっそく３年生の実習報告を目にすることになります。２年生にとって３年生は現場での体験を積んだ大先輩。さぞかし尊敬の念を抱いて聞き入るのかと思うと、いやいや厳しい質問を投げかけます。「どんな特技が役立ちましたか？」「どんな歌を歌ったのですか？」などなど。やがては自分たちも通らなければならない道を手探りで確かめているようでした。

現場の状況をつぶさに目にしてきた先輩たちの方がむしろ緊張感を漂わせているようで、福祉の仕事の現実を象徴しているようでした。

実習にあたっては、渡辺俊之学科長をはじめ、石坂公俊、金井敏、鈴木慶三、戸澤由美恵、永田理香、根岸洋人、塩津博康の各先生方が指導教官として、巡回指導など細やかな指導をされているようです。

報告会の終わりに指導教官のみなさんがコメントを述べ、実習体験の意義を強調していましたが、私たちも学生さんたちに心からの拍手を送って健闘を称えました。

大学内の介護実習室での実習風景　　（大学ＨＰから転載させていただきました）

「人生の最後まで心豊かで有意義に過ごしてほしい」

…社会福祉学科学生４人との座談会

広々とした駐車場、いかにも車が必須の群馬県。ここ高崎健康福祉大学も学生の車で一杯です。教室には大きなガラスが入り、授業開始を待つ学生の姿がよく見えます。女子学生が多く感じるせいか華やかです。

私達は前日の実習報告会を踏まえて、もっと聞き込みたいと座談会をお願いしました。座談会には、社会福祉学科准教授戸澤由美恵先生のゼミの学生４人が協力してくれました。少し緊張している様子でしたが、社会福祉士の現場実習体験を通して学んだことをそれぞれに話してくれました。

「人と関わることがしたい」…福祉を学びたいと思ったのは

まず自己紹介を兼ねて、「大学で福祉を学びたいと思ったのは何故か」と聞いたところ、４人に共通していたのは「人と関わることがしたい」ということでした。きっかけは家族のこともあります。祖母が認知症になったり、祖父が介護を受けていたりなどいろいろですが、「人と関わる仕事をしたい」という明確な答えがありました。最近、インターネットの影響もあって「人と関わりたくない」若者が増えている中で、嬉しい答えでした。

また、卒業後の進路でも相談援助や介護といった福祉の仕事に就きたいと４人ともはっきりと手を上げていました。

入所者は話したいことがいっぱい

実際に、福祉の現場で実習してみて、感じたことをそれぞれ話してもらいました。

安部美冴さんは「養護老人ホームで実習しました。養護老人ホームとは、６５歳以上の者であって、環境上の理由及び経済的理由により居宅において養護を受けることが困難なものを入所させる高齢者施設のことです。入所費用は本人の収入額に応じて、措置権者（入所前に住んでいた市町村）が階層別に決定します。自立度は高く、自力歩行・自立排泄可能な利用者が多いです。私の実習先には６５歳から９７歳までの方が入所していました。実習に入ってすぐに、初めて、利用者さんが亡くなったのを経験しました。ショックでした。感情の切りかえが大事だと言われましたが、なかなか難しくて。

初めて養護老人ホームで実習したので、「環境上の理由及び経済的理由」と聞いても、最初はどんな人が入所しているのかわからず、どう接していけばいいのか不安でした。実習中は、自分から積極的にコミュニケーションを取ることを心掛けていましたので、利用者の生活歴やさまざまな入所の経緯を知ることができました。その結果、一人一人違うニーズを持っていることを理解し、その人に合わせた支援をしていくことが大切であるということを学びました。

入所されている方は話したいことがいっぱいある、聞いてもらいたいんだなと感じました。利用者の悩みを聞いてさしあげることも大事な仕事ですが、中には、家族の虐待を受けて入所された人もおり、そういう事情のある人との関わり方は難しいと思いました。」

利用者の体や意欲に合わせる難しさ

吉田健志さんは「老人デイサービスセンターで実習しました。朝のお迎えからトイレ介助、入浴介助、昼食前の“ごっくん体操”（誤飲を防ぐための）、昼食、お昼寝、体操、レクレーションなどをしました。大学で勉強していましたが、実際の現場ではその通りにはいきません。実習で自分の力の無さを理解することができて、こ

れからまた頑張るか！という気持ちが強くなりました。例えばレクをするのも利用者の体や意欲に合わせて作り出すことの難しさを感じました。いやだという人には、一回りしてきましょうと一緒に回ってくると気分が変わります。その人の動ける範囲を理解しないで、ついこちらがやってしまうこともありました。」

さまざまな利用者の特性を理解し、接し方を学んだ

小嶋絢子さんは「特別養護老人ホームで実習しました。６５歳以上で、要介護認定を受けた人が入所しています。寝たきり、認知症、身体・精神に障害があるなど常時介護が必要な人たちです。私は直接介護には携わらなかったのですが、個別援助の相談に参加させてもらいました。認知症の女性のケースで、何度もトイレに行きたがって、ひどい時には２～３分ごとに行きたがるのです。その背景を考えると、人前でおもらしするのが恥ずかしい、一人でいると不安で落ち着かないという気持ちがあるのだろうと思います。実習中にさまざまな利用者とお話して、特性を知ることができました。また職員の方の接し方はとても参考になりました。例えば、徘徊する人に『どこに行くの』と（きつく）言うのではなくて『今日はどこに散歩に行くの』と（やさしく）声をかけるなど。」

困難な事例…自業自得か?福祉の手が入らないと死んでしまう

中武知世さんは「地域包括支援センターで実習しました。社会福祉士、主任介護支援専門員、保健師の三職種で連携を取りながら業務を行っています。総合相談、介護予防ケアプラン作成、ケアマネ支援、介護予防事業が中心の業務で、行政の直轄と法人委託がありますが、私の実習したセンターは市から委託されていました。

支援困難な事例として、様々な迷惑を掛け続けたことから家族からも見放された高齢者について、対策を検討しました。その方がやってきたことを見れば自業自得と思うかもしれませんが、福祉の手が入らなければその方は死んでしまいます。イライラする感情もありますが、そこは分けて対処しなければ。私はまだまだ経験不足なので、まずは介護の現場に入って経験を積みたいと思います。」

見えてきた問題・課題

実習を通じて、見えてきた問題、自分だったらこう改善したいと思うことを語ってもらいました。

吉田さんは「入浴介助は男性も女性も区別なくやりましたが、異性に介助されるのがいやな人もいるだろうと思います。やはり同性の職員がやれるといい。」と介護職員の少なさを指摘しました。

デイサービスには「週２回決められているから来るという感じの人もいますが、目的をもって来てもらいたいし、利用者さんの目的に合わせた内容が提供できればいいと思います。」そのためには、利用者の多様なニーズに合わせた施設づくりも必要になってきます。

小嶋さんは「私が実習を通して伝えたいことは、利用者に楽しみと思える機会をできるだけ多くつくることです。普段はボーッとしている人が多いのですが、利用者が何もしていない時は『今日は絵を描きませんか、何をしたいですか』など、その利用者の好きなことを促す積極的な声かけが大切だと感じました。（人生の）最後はもっと有意義に過ごしてほしいのに…と思います。」

そのためにも、人手が必要です。施設では余暇支援などをボランティアに頼る部分が多いようですが、専任の職員・スタッフ不足は大きな課題です。実習中にも「病院に異動する職員があり、ショックだった。」と言います。そちらはやはり給与が高いのです。

なぜ介護の仕事は人手不足なのに給与は低いのか

その背景に、介護職の専門性に対する認識と位置づけの低さがあります。戸澤先生によれば、「日本では介護は家庭でやるもの、家族介護が基本という介護観から始まりましたので、専門職としては低い認知と給与からのスタートでした。また業務独占と名称独占の違いということも一因にあります。例えば看護師は看護師の国家資格がなければ仕事はできませんが（業務独占）、介護職は介護福祉士という国家資格を持って仕事をする人も、持たない人も、現状では同じように仕事ができています（名称独占）。ですから待遇にも差がでてくるわけです。一方で、事務等の一般職に比べると、資格手当てや特殊業務手当てをつけて高くするなど現場の努力も知ってほしいですね。」

介護・福祉の職業の社会的地位と待遇の改善を

他人事ではない

私の義母は９５歳になり、埼玉の特別養護老人ホームに入っています。妻は週に一度訪問して様子を見ていますが、日を追って意欲が減退していると言っています。新聞も読まなくなり、細かい手作業が得意だったのに何もしようとしないと言います。月に一度、我が家に連れてくると、一緒に唄を歌ったり、ひ孫を相手にボール投げもします。でも、施設では大部分の時間が寝ているか、ボーッとテレビを見ているだけのようです。

小嶋さんが言うように、私も利用者の多くがボーッとしている姿を見ています。義母の施設は１０人の利用者に対して３人の介護士がついているようですが、一人ひとりのニーズに合わせた促しは少ないというか皆無とさえ感じます。デイサービスと特別養護老人ホームの違いもあるのでしょうが、人間の尊厳が損なわれているのではないかと思うこともあります。もちろんこのことは施設やそこで働く介護士の問題ばかりではなく、国の福祉政策や自治体の施策の問題も大きく関わっていると思います。高齢化社会を迎え、若い人たちが意欲を持って働ける職場であるために、充実した制度改革が求められていると感じました。いつか我が身も通る道と思うと他人事ではありません。

（須田章七郎）

母を支えてくれる若者たち

母がグループホームに入る時、言われたことが忘れられません。「娘が二人もおるのに、なんでこげな所に入らんなならんと！」。鹿児島は貧しい出稼ぎの県、私の同級生は殆んど皆、「集団就職」や進学で故郷を後にしました。「お前が行った先が故郷じゃっち思うて、気張れよ」と教えられて育ちました。宿命とは言え、母の言葉は耳に痛い言葉でした。

母は、父亡き後、私達が一緒に住もうと勧めても、住み慣れた鹿児島がいいと独り暮らしを貫いていましたが、米寿を過ぎた頃から認知症の傾向が現れ、得意だった料理もしなくなりお風呂にも入りたがらず鬱状態で寝ていることが多くなり、独り暮らしは限界に来ていました。グループホームに入ってからは「帰りたい」が口癖、「ここは籠の鳥じゃ」と訴えます。帰りたいのは、生まれ育った田舎の実家。父と苦労して建てた家のことはすっぽり抜け落ちています。だんだん年数が経つうちにあきらめて、グループホームに馴染んでいきました。昨年秋、９４歳で大腿骨骨折の大手術をしましたが、オムツの世話になりたくない一心でリハビリを頑張り、予想以上に早くグループホームに「帰りました」。今、穏やかな生活を送っています。

母が一番心を許しているお気に入りの職員は、孫娘に似た感じの穏やかな若い女性で奄美大島の出身。行事の時には、得意の楽器で盛り上げてくれます。福祉を学んだプロとしての関わり方には、教えられることが多く、こういう若者が高齢社会を地域で担っているのだと感謝しています。

（瀧口典子）

＜取材を終えて＞

高崎健康福祉大学社会福祉学科の学生も、介護や福祉のホープ・担い手としてそれぞれの地域に巣立っていくことでしょう。これからさらに進む高齢社会の日本で、彼らの仕事の役割はますます大きくなります。その仕事に見合う社会的地位と待遇の改善をと、切実に願わずにはいられません。

最後に、快く取材に応じご協力いただいた高崎健康福祉大学の関係者の皆さん、ありがとうございました。

（取材担当：倉林順一、須田章七郎、瀧口典子、長谷川陽子）